
人生の楽しい終わらせ方

鳴瀬 沓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生の楽しい終わらせ方

【Nコード】

N3693Y

【作者名】

鳴瀬杏

【あらすじ】

生きてるって感じてたくて、死ぬ方法探してるんだよ、あたし

「カナタはさあ……クリオネに似てる」

「知ってる？ クリオネってさ、

……死んだら溶けてなくなるんだよ」

死にたがりの少女、サエキ。

生きたくない少年、カナタ。

死に方を探していたはずなのに、いつの間にか、
二人で生きたくなっていた。

海に見える街で、静かに流れる
傷を舐め合う恋の話。

野いちごにて連載中の作品を、書き直して投稿しています。

いち

目の前で、人が死のうとしていた。

助ける気になったのは、彼女の目に空が映っていたからだ。

空を見上げたら、真っ青で綺麗だった。

だからちょっと、死んでみようと思った。

「……………さいあく」

かーんかーん、と踏み切りの音が響く中で、サエキは独り言を呟いた。

サンダルを拾い上げて、舌打ちすると、急にすべてのことがどうでもよくなった。

「お気に入りだったのになぁー」

オフホワイトのレースが可愛くて衝動買いした、ウェッジソールのサンダル。

何とでも相性がよくて、今年の夏はこれと黒いミュールをヘビロテだった。

でも、壊れてしまった。踏み切りを急いで渡ろうとしたら、線路に引っ掛かって足を捻った拍子に、ぽつきり。

まるで自分の現状を突き付けられてるような気がして、線路の上から動けなくなった。

あ、そうだ、死のう。

どうせなら最後まで綺麗なものを見ておくか、と思って、サエキは首を上に向けた。

風が通って、少し汗ばんでいた首筋を掠めていく。

髪が揺れた。

爽やかな日。

絶好自殺日和だ。

電車が迫り来る音を全身で感じるには、目を閉じた方が効果的だっただろう。

旋毛から爪先まで走る緊張感。タイミングを図るようなこと、死ぬ間際に、あまりにも野暮だ。

別に、選択の余地が、選ぶ自由があるわけではないのだ、自殺というものは。

自分の意志で、何かに殺される。

そのことに対する恐怖を煽るために、五感からの情報を限るべきだ。

それでもサエキは、空を見上げていた。

作り物めいた鮮やかな青を、睨み付けるように。

人の気も知らないでふざけんなよコノヤロウ。

今から死ぬからな、見とけよバーカ。

後になって聞けば、この時もし目を閉じていたら、サエキの人生は変わっていた（終わっていた）らしい。

に

結果から簡潔に言えば、サエキは死ななかった。

「ごおおおおう、と、風が鳴る。ぎゃんぎゃんいいながら、大きな鉄の箱が通りすぎた。

迫る電車が視界に入っても絶対に瞑らなかった目は、今なぜか固く閉じられていた。

「線路はやめときなよ」

轟音に混じって、高さの残る声が耳元で聞こえて、サエキは瞼を上げた。

少年が、口を開く。

「俺の友達、東京で駅員やってんだよね。大変なんだよ、掃除」

抑揚のない話し方。表情にも抑揚がない。

それが、人命救助なんて正義感と優しさの結晶のような今さっきの行動とは結び付かなくて、サエキは声を出すのを躊躇う。

「なんで……」

「はい？」

「なんで止めた」

少年は表情を変えずに答えた。

「言ったでしょ。友達が駅員なの」

「そんだけ？」

「あと、それから」

目が青く見えた。

そう言いながら少年は、サエキの目を覗き込む。切れ長の、眠そうなお二重。黒目が大きい。睫毛が長い。

サエキは、呑気に観察なんかしている自分に気付く。

「……でも気のせいだった」

「なんで目が青いと助けんのよ。外人好き？」

「いや、てつきりサエキさんは日本人だと思ってたから」
「は？」

そう声を漏らして、ようやくサエキは頭を使いはじめた。

状況を理解する必要と、この後のことを考える必要がある。

まず、なんでこいつあたしのこと知ってたんだ。

相手をよく見ようと、視線を顔から下に下げた。

服装が目に入る。ジーンズにパーカー。派手なピンクのチェック。

派手なチェック？

覚えのある表現に、サエキは「あれ？」と呟いた。

童顔に茶髪のショート。顔に特徴ないから、ピンクのパーカー目印にしてください、派手なチェックの。

昨日の晩に見た、チャットの文面だ。

「はじめまして。カナタです」

小首を傾げる目の前の少年に、サエキは口を開けたまま、首を上下に振る。

「あー……ああ！」

「サエキさんでしょ？」

「うん！」

色でわかった、と、サエキと合わせていた視線を、少し上にずらす。カナタの目印が目立つ色のパーカーなら、サエキの目印は髪の毛だった。

「メールで説明しただけなのによくわかったね」

「わかるよ。こんな髪の人、やかたまち館町に他にいないでしょ」

あまり明るくない茶色。

それだけなら至って普通、どこにでもいすぎてなんの特徴にもならない。

でも、サエキの髪は、空だった。

赤みを抑えた暗い茶に、深い青のメッシュ。

全体に散らばるように入ってはいるが、量のバランスがいいのか、汚ならしい斑とはほど遠い。

色合いは明るくないし、服装だって没個性的ないわゆる“流行り”のファッション。

それなのになぜか目を引くのは、夕暮れが終わっていく空のような髪色のせいだ。

不思議な色合いの髪に目を奪われて、それが“サエキ”だと気付いた。

次の瞬間には、踏み切りのバーを潜っていた。

黒いラインで縁取られた目尻。

気の強そうなメイクとは裏腹に、その表情にはなにもなかった。

真っ黒い瞳に空の色が反射して、髪と同じような藍色を作り出していた。

それが、綺麗だと思ったのだ。

だから、空が綺麗だったから、カナタは、サエキを助けたのだ。

さん

「つーかさあ」

独特の脈絡のなさで、サエキは口を開いた。

「というか、と前置きをしたが、別にそれまでなにか違う話題で話をしていたわけではない。」

それ以前に、話をしていかなかった。

「カナタ、すごい童顔なんだね。つーか女顔？ 文面とか大人っぽかったから意外」

「……別に」

少しだけ顔を背ける。

自覚しているし、コンプレックスに思っているわけでもないが、わざわざ言われて気分のいいものでもないんだろう。

カナタにとっては、サエキの遠慮のない話し方も、気の強そうな見た目も、少しも意外ではなかった。

話を逸らすように、カナタは手に持ったサンダルを差し出す。
サエキは踵の壊れたサンダルで不安定に立って、顔を歪めた。

「これでいいじゃん」

「ちよつと、ありえないしこんなショボいビーサン」

「だって靴直してる間の間に合わせでしょ」

「だからってさあ……。無駄な買い物はしない主義なの」

「この間、服買いすぎて今月ピンチって言ってなかったっけ？」

「服は無駄じゃないでしょ。着るもん」

「そんなに買って、全部着れるの？ そのうち、一日に3回くらい

着替えなきゃいけないのかもよ」

やりとりだけなら、チャットでの会話とほとんど変わらない。中身の軽い軽口の叩き合いで掲示板のレスが埋まるのを避けて、わざわざ二人限定のチャットルームを用意したのだ。

それはいつからかメールになり、自然と、コミュニケーションを取っている時間が長くなった。

カナタが十日ほど前、サエキの住んでいる館町に引っ越してきたのをきっかけに、会って話す方が早いんじゃない、ということになったのだ。

ただ、掲示板でもチャットでもメールでも味わえない、相手が笑っている、笑っていることを感じられる、という感覚が、どうも不思議だ。

カナタの目の前にいるサエキは、ウェッジソールのサンダルを3足ほど見比べながら、言う。

「用事ってなんだったわけ？ 彼女の呼び出し？」

近くで店員が、行儀良く立っている。

「他のサイズもお出ししますよ」とか「色違いもございます」とか、隙あらば話しかけてくるつもりなんだろう。

カナタは、そういうテンプレ的な積極性があまり好きではない。

「違う」

「なにが？」

「彼女はいないよ」

「まあ、リア充があんなところ出入りするわけないか」

「サエキさんは？」

「いないよ。彼氏はね」

「彼女はいんの」

「さあ、どうでしょうね」

ふうん、と、興味なさそうに返す。

サエキは、「これにしょ」と言っ、棚の下に押し込まれた箱を眺めはじめた。

カナタも一緒に屈んで、聞く。

「いくつ？」

「22半」

「ちっちゃいね」

「うるさいなー、気にしてんの。そっちだってそんなにでかくないじゃん。何センチ？」

「いいだろ別に」

後ろに人が立つ気配がした。店員だろう。

カナタは自分の右横にあった箱を、「ほら、これじゃない？」と指差す。

箱の蓋をずらすと、コルクの厚底に、薄いベージュのトーションレースが見えた。

サエキが今履いている壊れたサンダルも、似たようなリボンの、似たようなデザインだ（きつと彼女にして見れば、全然違うんだろっけど）。

「……好みは意外と乙女だね」

「うっさいよ」

「さつき、無駄な買い物はしないって言ったじゃん」

斜め前を歩くサエキが振り返る。

カナタは、キーホルダーを手に揺らしてみせた。

半眼とへの字口が、妙に可愛くない猫のマスコット。手足が細長く、三角形の上に台形を重ねたような体型をしている。

箱を抱えてレジに向かったサエキが、戻ってきた途端にカナタに「レジ横に可愛いのがあった。あげる」と手渡したのだ。

「こーゆうのは無駄じゃないのー」

「どこが？」

「お近づきのしるし。カナタに似てたから」

「え？　はあ……どうも、ありがとう」

反応うつす！と、サエキが笑う。

カナタは感情が見た目に出ないというだけで、中身まで抑揚がないわけではない。

でも、それをわかってくれる人は今のところ、一人もない。

これに似てるのか俺、と、眠そうな猫の人形を眺めて、口を開いた。

「でも、やつば意味ない気がする」

「キーホルダー？　素直に受け取っとけよー」

「サエキのサンダルも。……どうせすぐ履かなくなるじゃん」

今が秋だから、という意味ではない。

この先ずっと、ということだ。

「誰か履くかもしれないじゃん」

「姉妹とかいんの？」

「えーと……今どこにいんのかわかんない姉ちゃんが」

「……どうせだから最後に全部売ってさっぱりしちゃえば？」

二人が話しているのは、将来のことだった。

近い将来。

そして、その先はない。

「うーん売るかぁ……」

「どのくらいになる？」

「服とか靴とか……ゲーム、CDに漫画に……十五万は下らないかも。でもそのお金どーすんの？」

「最後に使えばいいーじゃん」

「えー？ なにに使う？」

「演出？ 十五万もあれば結構色々できるよ」

「例えばー？」

「んー……豪華ホテルの一室で、派手なドレス着て、とか」

「あ、ちよつとそれ色々考えよう。どんなのがいいかな」

来週の旅行、どこに行こうか。

ちよつと遠出してみたいよね。

そんな話をするノリで、カナタとサエキが話しているのは、人生の最期の彩り方だった。

「やつぱどーせ死ぬならさー、派手にいきたいよね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3693y/>

人生の楽しい終わらせ方

2011年11月17日19時36分発行